

僕がサンタになった日

あらずじ

「あなたは2007年サンタクロースに任命されました」

「はあ?????」

ある日朝起きていきなりそんな手紙が置いてあったらどうします？

しかもそれが本当だったら

変化のない毎日を過ごしていたミタノリオの元に送られてきた一通の手紙がノリオの人生を大きく変える事になり、サンタクロースを通して世界の事情を知る事になる。「あったらいいな」のクリスマスファンタジーです。

第一章

一通の手紙

朝起きたら枕元に一通の赤い封筒が置いてあった。ノリオは飛び上がっておどろいた。ノリオは一人暮しだ。36歳にもなってフリーターやりながら特に好きな事があるわけでもなく、彼女がいるわけでもなく毎日をだらだらと過ごしていた。

そんなノリオの枕元に手紙が置いてあるなんて、まさに青天のへきれきだ。

赤い封筒には確かに「ミタノリオサマへ」と書いてある。

「一体誰が・・・」ノリオは慌てて部屋の鍵を確認した。鍵はかかっている。その次に一つしかない窓を確認した。鍵はかかっている。

「一体どうやって・・・」

でもノリオは元々ファンタジーものが大好きだ。怖いと思いながらも心の中ではワクワクしてた。

「この中には何が書いてあるんだろう・・・?」

おそるおそる開けてみた。赤い封筒はしっかりと糊付けしてあって破らないとダメみたいだ。

中に入っている二枚の手紙を出した。二枚目は白紙だが、一枚目を見てみるとびっくりする事が書いてあった。

「サンタクロース契約書」

「なんだこりゃ・・・?」

一瞬馬鹿にされている気分になった。「新手的勧誘か?」と思ったが、そんな手紙をわざわざ鍵が閉まってある部屋に鍵を開けずに入って置く訳がない。だから怖いもの見たさで続きを読む事にした。すると更に驚くべき事が!

サンタクロース契約書

厳正な審査の結果

2007年のサンタクロースはミタノリオさんが選ばれました。

おめでとうございませう

サンタクロースをやって頂くにあたって沢山の決まりがございます。まず一つは、クリスマス前の一週間はご自分の仕事が出来ません全てこちらで管理させて頂きます。二つ目は一度引き受けられたら何があってもやめられません

その代わり一生忘れる事のない最高の思い出が出来る事でしょう。受諾方法は簡単です。

この手紙の二枚目に手を置いて「ありがとうございます。引き受けさせて頂きます」と言えば受理されます。お返事お待ちしております。

ミカエルより

ノリオ「・・・」体が固まってしまった。なんだこりゃ・・・？

こんな事あるはずがないだろ！でも考えた。毎日特にやる事なんてないし、寝て起きて居酒屋にバイトしに行って唯一の楽しみと言えば仕事終わって店のビールを飲む事だ。なんとなくバイトの子に疎ましがられている事ぐらい気付いている。クリスマスだってそうだ。シフトはみんな決めて決めるものなのにクリスマスイブと25日は勝手にバイト入れられている。予定がない事を完全に決め付けられて相談もなしに入れられるのは少し悔しい。まあ働けるのはありがたい事だが少しくらい配慮してくれたっていいだろう。

よし！決めた！こんなつまらない毎日暮らすくらいならやってみようじゃないの！

面白そうだし。何たってサンタに来てほしいって思う事はあってもまさか自分になるなんてそんな経験一生出来ないしね。

でも本当にサンタになれるのだろうか？手を二枚目の手紙に置いてなんか言えて書いてあったよなあ・・・どれどれ？あった！これだよし、やってみよう

手を置いて・・・大声で叫んだ

「ありがとうございます！！引き受けさせて頂きます！！！！！！

しーん「・・・」なんにもならない

やっぱり騙されたんだ・・・なんか急に恥ずかしくなった。そんな事あるわけないじゃんなあ・・・なんか手を置いて叫んだのを誰かに見られていたりするんだろうか？それとも隠しカメラとかあったりするの・・・と、その瞬間手を置いていた紙が熱くなり、その熱さでびっくりして離れたらなんと

じわーっと文字が浮かんできた！ノリオはあまりにもびっくりして目が点になりながらぼそっと言った。

「信じられん・・・」

第二章 大天使ミカエル

あなたは2007年サンタクロースに正式に任命されました。おめでとうございます！それでは任務に当たって色々説明がございますのでそのまま携帯電話を持ってお待ち下さい

ミカエル

「文字が浮かんで来た事には驚いたけど、この文章わざわざ浮かべる程の内容じゃないじゃないか」そうしているうちに電話が鳴った

「Jingle bell♪Jingle bell♪」

「そんな着うたダウンロードした覚えはない！！！！」覚えのない着うたが鳴り続けている携帯に恐る恐る出てみた。しかも登録なんてしてないのに携帯画面にはちゃんとミカエルって載っている。

「もしもし」

電話の向こうはかなりテンションの高い男の声だった。

「おめでとうございまーす！よく引き受けてくれたわねーこれから色々守ってもらわなきゃいけない事とやってもらわなきゃいけない事が山ほどあるの。一つは今から研修期間に入るからね、ちょっと行ってもらいたい所があるのよーその入口はあんたの部屋のその趣味悪いポスターの向こうに作っておいたからそこら行ってちょうだい。誰だつてサンタになれるわけじゃないのよ、仕事だつて研修つてものがあるでしょ？あんたがやってる事なんかよりよっぽど難しく大変なんだから！ああ、あなた居酒屋勤務だったね、本当こんな人に出来るのかしら？まあいいわ。一つ一つの事を確実にクリアしてちょうだい。まず一つは・・・」

ノリオ「ちよつちよつと待って下さい！！」「何よ？」

「なんなんですかあなたはいきなり出た瞬間早口でしゃべりまくって！しかも人の携帯の着うたを勝手に変えたりして」「素敵でしょ、あなたの着うたダサいんだもん。そんな事よりあんた何私がいやべつてるのに止めるのよ！今からが大事な所なのに！」「確かにそうかもかもしれませんが大事な事なら尚更落ち着いて話しましょうよミカエルさん」約一秒の沈黙を経てミカエルが口を開いた。

「いいわ、落ち着いてゆっくり話しましょう。あたしも急ぎすぎたわ。いい？よく聞いてサンタクロースには色々必要な能力があるの。」

「能力？」

「そう、まずは同時通訳機能。世界中の言葉を知らなきゃいけない。」

「え！世界中に行くんですか！？」

「全部じゃないわよあなたの担当は日本以外にもう3国くらいあるけどそれはまた教えるわ」

「はあ」

「そして壁や物質を通り抜けるTransparency機能、時間をゆっくり流す機能。まあ、それはソリーに乗って進めば勝手に時間が逆流するからスリーフォレをまわった後に1番最後に行けば大丈夫。」

「スリーフォレって何ですか？」

「ああ・・そうね、まだ説明してなかったわ」

「スリーフォレって言うのはSleeping Forest（眠りの森）の事、その能力を取得するにはその森に行つてそれぞれの精霊に頼んで貰つてこなきゃ行けないの。全部貰つて初めてサンタクローズになれるよ。ポスターめくつた所に入口作つたつて言ったでしょ？そこから入って行けば行けるわ。簡単じゃないけどせいぜい頑張つてちょうだい」

「そんなに難しいんですかー？自信ないなあ」

「何言ってるの？一度引き受けたら戻る事は出来ないのよ！そうゆう契約でしょ？」

「放棄したらどうなるんですか？」

「放棄？そんな事口にも出さないでちょうだい！恐ろしい！いい？放棄したらあなたにクリスマスは二度と来ないのよ」

「え・・それってまさか・・・」

「そう、そのまさかよ。あなたにはもう二度とクリスマスが訪れないの。街中クリスマスになつてもあなたにはそれが見えないの。クリスマスソングが流れてもあなたにはそれが聞こえないの。考えただけでも恐ろしい！」

「・・・」

ノリオは元々そんなにクリスマスにそこまで執着はないのだ。なんだ・・クリスマス来ないっちゅーから死ぬのかと思った。でも微妙に嫌だからやってみるか。そう決めて言った。

「頑張ります！」

「よし！決まりね！あなた中々決断が気持ちいいわ。それじゃあ早速今日から始めましょう」

「え？クリスマス近くの一週間だけじゃないんですか？まだ一ヶ月前ですよ！そんなにバイト休めませんよ！あれは嘘だったんですか？」

「嘘じゃないわよ、あなたのデータはもう打ち込んであるの。だからあなたの周りの人の脳にあなたの行動パターンを張り付けとけばあなたがちゃんと働いてるような錯覚をおこすから問題はないわけ。でもそれは24日分しか使えないからクリスマス当日には仕事を休んでもらうしかないのよ。それにしてもあなたのデータ打ち込んでたけど、よくそれで首にならないわね？」

「ほっといて下さい！了解しました。それで僕は一体何をすればいいのですか？」

「今言ったでしょー！！！！！！！！！！」

「あつ、ごめんなさい、間違えました。何をじゃなくて何から始めればいいですか？」

「まず最初に入口をくぐったらポスターを全部閉じてちょうだい。少しでも光が入ったらスリフォレは現れないから。スリフォレが現れたらとにかく真っ直ぐ進んでちょうだい。そしてら滝が見えてくるからその滝をくぐって洞窟を真っ直ぐ行くの。そこにいるファシユラと言っじいさんがいるからそのじいさんに今年のサンタクローズに選ばれましたって言ってちょうだい。後はじいさんが教えてくれるわ」

「わかりました。そのおじいさんを探せばいいのですね？」

「わたしはクリスマスまでにやらなきゃいけない事が山ほどあるの！あんたに付き合っただけあげるのはいこれっきりにしてもらえる？」

「はあ」

「わかったら早く行ってちょうだい！本当にこの男で大丈夫なのかしら！ヤマジはなんでこの子を選んだのかしら？」

「ヤマジ・・・？」

「いいから早く行きなさい！」

どうやらまだまだ謎は沢山あるようだ。ノリオは疑問に思いながらも左手には靴を抱え、右手でゆっくりポスターをめくった。

第三章 Sleeping-Forest

携帯を切り、ポスターをめくってみたらそこにはぼっかり穴が開いていた。

「こんな事ってあるんだな」ノリオはまだ半信半疑だった。

「なんかのドッキリとかじゃないだろうなあ？」

疑いながらもその穴に入って言われた通り光が入らないようにポスターを閉じた。

暗闇は思ったよりも短かった。暗くなったかと思うとまるでその暗闇もなかったかのように辺り一面にそれはそれは見た事もない美しい森が広がっていった。

少し霧がかかった感じでまるで早朝の森って感じた。ふと不思議な事に気付いた。生き物の声がしないそれに気付くと少し怖くなった。鳥の鳴き声もしない森を経験した人はいないだろう。

それは想像以上に気味の悪い光景だ。そうは言え、もう振り返っても出口があるわけじゃない。前に進むしかないのだ。ノリオはひたすら前に進んだ。そびえ立つ木々は沈黙しながら、でも森全体に見られてるような感覚に襲われる。夢の中に出て来る森ってこんな感じなんだろうなあって思いつつひたすら歩く。無音の中だんだん遠くに「ゴォー」って音が響き始めた。

「音がする！！！！」音がして嬉しくなるなんて初めてだ！

ノリオは元気を取り戻したかのようにどんどん進んで行った。すると向こうに太陽の照り返しでキラキラ輝く湖面が見えた！

「やったー！！」

「ゴオー」って音はさらにでっかく、ノリオは改めて生きてる自然って最高だなと思った。そのまま進むと目の前に湖が広がった。遠くまで広がるかなり大きな湖だ。左側を見ると、湖がそのまま運河のようにずっと向こうまで続いていて、かなり綺麗だった。右方向にはついにその音の主である滝を発見した。言われた通り滝の方向へ進んでいく。

「滝の中に入れて言ってたよなあ・・どうやってこんな激しい滝の中に入るんだろう？」

滝の近くまで来たら三輪車で降りるくらいの小さな坂を発見。右斜めにくだってるのでそれをたどって降りた。人が一人歩くのがやっとくらいの細い土手を進むと少し広い所にでて、左側に滝が見える。さらに進んで滝に近付くと、滝の裏側が見えて思ったよりも普通に入れる感じだ。

「よし！行ってみよう！」

第4章 水の精霊ファシユラ

洞窟へは意外と簡単に入れた
中はひんやりとしていて
靴音が響く。

これ以上入ると
真っ暗で見えなくなる感じだ

その時に奥の方から
一匹の螢が小さな光を放ちながらこっちに近付いてくる
そして斜め左側の洞窟の壁にピタとことことついたらその青白い小さな光は
「じわーん」と少し大きい光になった

もう少し奥に歩けそうだなと思って進んだら
また一匹螢が飛んできて
今度は右側の壁にくっつき、辺りを照らしてくれた
気がついたら
奥の方までその青白いライトで埋めつくされ懐中電灯がなくても
歩けるようになってた

ノリオはふと思った

「歓迎されてるかも」

その光を辿って歩いて
いくと下へ降る階段があった

そこを進んでいくと
突き当たりにぶつかり
よく見ると小さなドアがあった

「ここだ」

コンコン
コンコン

中から声が聞こえた

「どうぞお入り下さい」

カチャッと開けると
出迎えてくれた人が
ドアの前に立っていた

くりっとした優しそうな
大きな目に真ん丸な鼻

歳がわからなそうなシワの入り方、白に近いブロンドかかったウェーブかかった
髪に赤い繫ぎのような服
少しサンタに似た感じだ。

「この人がファシユラ？」

「よく来たね」

ってニコツて微笑む姿は
落ち着きさえ感じる。

が！

威厳は全くない

なんせすんごく小さいのだ。

どれくらいかと言うと

5才くらいの子供くらいかなあ・・・？

その小ささに驚いて
棒立ちしてるとその小さき人は言った

「君がノリオさんかね？」

「そうです！はじめましてミタノリオと申します。2007年のサンタクロースに選
ばれてミカエルさんに言われてここにやってきました！」

大きな声でハキハキと
言った

まるで面接の気分だ

「おめでとうノリオ。」

ミカエルから聞いてるよでは今からファシユラの所へ案内するから着いてきて」
そうするとその小さき人はドアを開けてまた洞窟の中に出た。

この人がファシユラじゃないんだ・・・

そう思いながら小さき人について行ったが
よく見るといつの間にか手を繋いで歩いてた。

あまりにも自然過ぎてノリオはしばらく気付かなかったが、
記憶を辿って行くと手を出したのは
ノリオの方で向こうも
それに自然に答えて手を
出して繋いだのだ。

「この小ささに俺の父性本能が働いてしまったってわけだ。横から見たら子供み
たいだもんなー」

そう思いながら彼を見ていたら、彼もそれに気付いてこっちを見たが、目が合った
ら恥ずかしそうに目をそらして、また前に向かってテクテクと速度を早めた

「それにしてもこれさっき来た道じゃねえか」

そう思っているうちにノリオが歩いて来た洞窟の
入口にある滝の裏に着いた。

ノリオは思いました

「別にあの部屋に行く理由ないじゃん」

そう思っていたら小さき人はノリオを見て
言った

「別にあの部屋に行く理由ないじゃんって思った？」

「い、いえ！そんな事思ってません！（汗）」

「ノリオ！見てろ！」

小さき人は腰にかけていたバッグから何かビンを取り出し、滝裏に向かって飛び込んだ。

何が起こったのだとドギマギしていたら目の前にすごい水柱が上がり、3メートルはあるだろう水柱は人影に変わった

「わしがファシユラじゃよく来てくれた」

こんな見た事もない凄まじい光景にびびりながらも、ノリオは答えた

「はい！2007年サンタクロースを選んで頂いたミタノリオと申します！」

水の響く音のような深い声でファシユラは言った

「よくここまで来てくれた。サンタクロースは君が思ってる以上に大変な仕事かもしれないが

きっと君の人生にとって大切な時間となるはずだから一生懸命やってくれ」

「はい！ありがとうございます」

そしてファシユラは小ビンをノリオに手渡した。

「これを飲めば身体が軽くなり、浮く事も出来る。どの家でも擦り抜けて入る事が出来る。姿を消す事だって出来る。」

ノリオの頭によぎった・・・

「危険な薬だなあ」

ファシユラは言った

「そうだ。危険な薬だが悪用するとたちまち能力は奪われ、丸裸にされて置き去りにされるから

そうゆう事は考えないように」

「！！！！なんで考えた事がわかるんだ！！！」

「次は西のスリフォレにあるエルザ館に行ってそこにいるババエロから知恵の薬を貰ってきなさい。」

「ババエロ・・・？それはどうやって行けばいいのですか？」

「心配無用。連れて行ってあげるから湖に入りなさい。」

何されるんだろう・・・

って思いながら

湖に入った

そしたら

「ゴオー！！」って

すごい音がした後に

水が渦巻き、物凄く大きな水柱になって

ノリオはぶっ飛ばされた

第5章 浪漫飛行(1/5)

ファシユラにぶっ飛ばされ、空中に舞いながらノリオは思った

「ファシユラさんって優しそうな感じがしたけど、やる事過激だよな。何もぶっ飛ばさなくてもいいじゃんあ」

しかもノリオは貰った小鬘があのお小さき人が鞆から取り出したものだと同じって事に気付いた
気付いていたけど多分ファシユラはあのお小さいやつと同一人物だよな

て事は別に滝裏に戻らなくてもよかったんだよ・・・
多分カッコイイ所見せたかったんだろうね・・・

あんなに小さくてかわいいんだからしようがないか

そんな事を考えながら空中に飛ばされてたら

水に濡れてダメになったはずの携帯が鳴った

「こーのおおーぞらに翼をひろーげ♪飛んでゆきたいよ♪」

今の俺の状況にピッタリの粋な着うただ・・・

サブスクリーンの着信主の名前は

「大天使ミカエル」

天使に大が加わり、大天使になっている。

何も今かけてこなくても いいのにと思いながらノリオは出た。

「もしもし」

ミカエル「あんた！！遅いわ！！遅い遅い遅い！！！！何モタモタしてんのよあんたノリオか？ノリオなのか？」

ノリオ「ちょっと待って下さいよ！遅いのは僕のせいじゃない・・・」すかさず

「ダーッッ！！言い訳するんじゃないわよ！！やる事いっぱいあるんだからね！こんな所でモタモタしてるやつがサンタクローズになれるわけじゃないじゃない！」

ノリオ「大天使ミカエルさん・・」ミカエルの荒い鼻息はピタッと止まった

ノリオ「ノロノロしてる訳ではありません。一つ一つの事を丁寧にしているだけです。せつかく大天使ミカエルさんにご指導受けたのですから」

少し間が開いた後落ち着きを取り戻したミカエルは口を開いた

。「そうね・・あたしも焦りすぎたわ。あなたの言う通りあれはファシユラのせい
。いちいちあんな格好になりに滝まで戻る必要ないわ

格好付けたかったんだろうけど

まあ、でもあなた気に入られた証拠よ

あなたが遠くに飛ばされて光となるまでファシユラはあんたをうっとり見送ってたもん」

「はあ」この人見てたんかいな・

「次のババエロはおししゃべり大好きだから気をつけなさいよ。いい？知恵の薬をもらうだけよ！時間はあんまりないんだから。わかったわね」

「カチャ」わかりましたって言おうと思ったのにそんな一方的に切らなくても・・と、その時

第6章 西のスリフォレ

バサーっ！！！！ドガン！！！！

「イタタタタ・・」

ファシユラさんやっぱり無茶苦茶だ完全に痛いわ

と、その時にまた着信が

「あわてんぼうの♪サンタクローズ♪おっこちた♪」ご丁寧に「煙突のぞいて」の部分がカットされてる！ミカエルだな

「もしもし」

「あノリオちゃん♪大丈夫？一つ言い忘れたわーファシユラに貰った薬を飲めば地面に落ちてても大丈夫よ今すぐ飲みなさい♪チャオー」

「カチャ」

「・・・・」

まず第一。着うたがわざわざおっこちた♪を強調されるようにアレンジされてたよね？

そして第二電話に出た時に「大丈夫？」って聞いたよね？

そんでもって完璧にとぼけたよね？あの人が目的なんだろう・・・

イテテ

まあ空から落ちた割には衝撃は少なかったけどさあまり深く考える事なくノリオは立ち上がった

「サンタになれるんだから、いちいち気にしない」ここが西のスリフォレなのかな？

さっきよりはなんか温かい感じがするその時に背後に人の気配を感じた

振り返ってみるとそこにはまた小さな生物がこっちをじーっと見ていた。さっきとはまるつきり

違うどう考えても人間っぽくはない。

玉ねぎみたいな頭にとぼけた渦巻き状の目ハの字まゆげにぼっちやり鼻がついてて逆三角に笑った口が顔の右下のほうについてる。顔に比べたら身体は異様に小さいどちらかと言うと

かわいいので怖くはなかった。ノリオは声をかける事にした

「こんにちは。エルザ館ってどこかわかりますか？」
するとその玉ねぎみたいな妖精は顔を赤らめて

「あっち」
って言って逃げてしまった。なんかわからんけどかわいいからいつか♪
その妖精が指した方向を見てみると洋館みたいな古い建物があった
「あれかあ」

第7章 エルザ館ババエロ

ノリオはその建物に向かって歩いて行った。綺麗な池に架かる。橋を越えると少し森が続き、その奥に潜む建物までにそんなに時間はかからなかった。洞窟の時とは違う。大きなドアをノックするとドアは勝手に開いた。内開きのドアだからやっぱ洋館だ。自動ドアなのかな？とか思いながら進んで行く。するとご丁寧な壁で矢印が点滅している。ノリオは入って右側の通路を矢印の方向に進んで行った。そしたら突き当たりにつかっいたら突き当たりを指した矢印が点滅している。左にしか行けないんだからここに矢印置かなくても思いながら進んでいく。そのままっすぐ行くことするとすぐに左矢印が点滅してたので曲がってまっすぐ進んだ。

そしたら玄関の方に出てその玄関の中央にある階段の所に上にあがれと言わんばかりの矢印が点滅している。

「最初から玄関に入った時点で階段のぼらせろよ!!!」

しょうがないからそのまま階段を上る。すると今度は右矢印が点滅してたのでそれにしたがって歩いたら「203」号室が点滅していた。ノリオはとてもしつこい

「趣味悪いよなあ

ババエロってどんな人なんだろう？どう考えてもこの建物の作りはエロババアだよな」

コンコン・中から声が聞こえた

「どうぞ入って」

ガチャ

「うわっ」思わずノリオは声をあげてしまった。中にいた女の人はおばあちゃんではなく、

見た事もないぐらい美しい人だった。その女の人はノリオを見て微笑むと

「よく来たわね。疲れたでしょう。ほしいものはこれね」

そう言って小ビンを手渡された

「じゃあ気をつけてね」と、立って向こうの部屋に行こうとする。ノリオは慌てて

「まっ、待って下さい」

ババエロは振り返る。その振り返り方がまた美しく、まるで白いモヤの中をスローモーションに振り返ってるみたいな錯覚を招いた。

そして下からなまめかしい瞳で見上げるようにノリオを見つめながら

ババエロはその憂いを帯びた唇をそっとを開いた。

「どう？今の錯覚は」

「錯覚かい！」なんて人だ・自分を自分で演出してる。そりゃあそうだ、こんなに美しいんだもの
ノリオは思い切って聞いた「これは何の薬ですか？」

ババエロは少し寂しげな顔でうつむきながら答えた

またそのうつむいた顔が

美しい

この地球上に女神様がいるならまさにこの人だろう

「ファシユラに聞かなかった？この薬は知恵の薬よ。サンタになるには沢山の住所や名前を覚えなきゃいけないし、色んな国の言葉を覚えなきゃいけない。手話だってなんだって出来なきゃいけないし知識もいるの

その手助けをしてくれるのがこの薬よ」

そう言うのとゆっくりと

微笑んだ

また白いモヤがかかっている

多分演出だろう。

それでもいい！かかってしまいたいこの魔法！

「もう一つお聞きしたいのですがさっきこの場所を玉ねぎのような妖精に教えてもらったのですが一体何ものなのでしょう？」

「ああ、てんちゃんね。

会えたんだ

見えたんならよかったね気に入られてる証拠よ」

「てんちゃん？」

「てんのすけって言ってSleeping-Forestの妖精よ。日本で言う座敷童子みたいなもの

普通の人には見えないけど姿を現すって事は

あなたに付いて行くって

事だから

きつといい事起こるわよ

あなたを色々と助けてくれるわ」

ノリオはなんだか嬉しくなってきた

第8章 FRY HIGH

空へ飛ばされながら

ノリオはぼーっと思いつきにふけていた

「綺麗だったなババエロさん・・・

あっそうだ、またあの衝撃は嫌だから今のうちにファシユラさんに貰った薬を飲

もう。」

ポケットから小ビンを取り出した

中には銀色の玉が入ってる

「ゴクっ」

なんとも言えない感覚！口の中ですぐ溶けて冷たい炭酸が身体の中に広がったよ
うな

そんな変な感覚が身体中に広がった

「こりゃあすごいな」

そう思っていると身体がふと軽くなった

「サンタに一歩近付いたぞ」

その時にまたミカエルから着信が鳴る

「タターララタララー♪タターラー♪」

名曲「コンドルは飛んで行く」だ。相変わらずいいチョイス。

今この空を飛んでる、いや、飛ばされてるこの景色にあまりにもピッタリだった。しばらく出ずに音楽を聞いていたが、ふと我にかえり電話に出た

「もしもし」

「あんたー!!!!!!」

やっぱり(笑)

「あの大天使ミカエルさん」

荒れぶたのような鼻息の勢いはすぐに止まった

ノリオは続けて言う。

「ババエロさんに薬をもらい、時間はなかったのですが、森に出会った妖精の事を聞いたり次の場所を聞いたり必要な事だけを大天使ミカエルさんに言われた通り、ちゃんと着実にやってきました。次はアイユール島のダンジュラスさんを訪ねに行ってます。」

ミカエルは少し間を置いて口を開いた

「少しずつ成長していつてるようね。

上出来よ。意地悪なババエロが素直に渡したぐらいだもんね

私の選択はあながち間違いではなさそうね」

「ありがとうございます」

「もう薬飲んだんだから

そのまま飛んで行けるわ。ダンジュラスは怒らせたらやっかいだからくれぐれも
丁寧に話すように！わかったわね？」

そう言って電話を切った

飛ばされながらしばらくは薬の説明書を読んだり、それなりに有意義に過ごして
いたらだんだん勢いが止まってきたので
辺りを見渡す事にした

いつの間にか周りは雪だらけ

多分薬の効果で寒くないんだろうけど

困った事は吹雪で先が見え辛い

よく目をこじらせて見ると海岸っぽいのがあって

その先に島が浮かんだ

「ここだ！」

ノリオはそこに向かって

飛んだ

ノリオの肩にはちょこんとてんのすけが乗ってる事には本人は気付いていない

第9章 アイユール島ダンジュラス(1/6)

小さな島だったので

小屋はすぐに見付けられた

薬が効いてるとは言え、

ここまで雪だとさすがに寒い

早く中に入りたいたいから

直接ドアの所まで飛んで

いったら間違えて

ドアにぶつかってしまった

「バンっ」

その音が乱暴なノックみたいになったのだろう

「誰だー！！）））」

中からすごい恐ろしい声が出て勢いよくドアが開いた

「誰だお前は？」

熊のようなヒゲ男は

形相でこっちを見ている

なんて怖い顔だ

「はい！2007年サンタクロースに選ばれたミタノリオと申します！

エルザ館のババエロさんから紹介を受け、最高の男ダンジュラスさんへソリーを

戴きにありがとうございました！

始めて飛んだので着陸を間違えてしまい大切なドアにぶつかってしまい申し訳ありませんでした。」

「最高の男？」

「はい！ババエロさんがそう申していましたので。彼の作るソリーは僕なんかに乗るにはもったいないと！」

「ババエロが・・・」

男は急に真っ赤っか、

驚くほど垂れ目になり、嬉しさを

隠せない様子で言った

「さっ、中に入った入った♪」

中に入ると外から見るとよりは広い作りになっており、とても暖かい

「よく来たな。お腹がすいてるだろう

温かいスープでも飲みな」

そう言えばノリオはこの不思議な世界に来てから
一回もご飯食べてなかった

「いやー！嬉しいっす！」

木で作られたテーブルに
置かれたスープは
すごくいい匂いをさせてた

「いったきまーす♪」

「うまい！うますぎます！」

ダンジュラスは言う

こんな若い男がサンタに選ばれるのは珍しいらしい
やはり、サンタはおじいさんが選ばれるようだ

「それ食ったら裏行くぞ」

「はい！」

ノリオはダンジュラスに
付いて行った。

部屋の奥のドアを開けると右側に通路みたいになっていてそこを進んで行くと小
屋があった

ガチャ

中に入ると片側に4匹、
もう片側に4匹ずつの
トナカイがそれぞれの
小屋にいた

すごい綺麗なトナカイだ

「よしよし、お前達、もうすぐ仕事だからな！
しっかり働いてこいよ」

ダンジュラスはそう言ってトナカイの頭をなでながら奥の部屋に進んだ

「こっちこい」

なんにもない部屋には
真ん中にブルーのシートがかけられてある何かがあるだけだ

ダンジュラスはそのシートを勢いよく取った

「これが今年のノリオ用のソリーだ」

「サンタが乗るソリーってこんなに美しいんですか？」

「違うよ」

「え？」

「このソリーに乗れるのは選ばれた奴だけだ。
サンタはお前一人じゃねえ
ソリーだって何台もいるんだ。」

ノリオは不思議に思いダンジュラスに聞いた

「どうして僕なんですか
？特別な事って何もしてないですけど」

ダンジュラスは答えた

「よく見てみる、このソリーの操縦席前の所に
石をはめる台があるだろう？そこにはめる。パラスの石を取得出来た奴だけがこの
ソリーを操縦出来るんだよ。」

「僕そんなの持ってませんよ」

「お前は本当に運がいいよ。
パラスの石は西のスリフォレの奥地に行かなきゃ手に入らない上、
普通のやつは絶対に見付けられない。」

でもお前が肩に乗せてる
てんのすけがその石を
お前の為持って来てるよ」

「え？」

その時、ノリオの肩からあの玉ねぎの妖精が
ぴよこんとソリーの椅子に飛び降り、
赤く光るパラスの石を
カチャってはめた

するとソリーが光り始め、ウィーンウィーンと
始動し始めた。

「このソリーは普通のやつと違ってお前が行かなきゃいけん場所が画面に
映るようになってる。

最新型タッチパネルだ
セットすれば勝手に連れて行ってくれる。
ちよっと乗って待ってろ」

そう言ってダンジュラスはさっきのトナカイ小屋に戻り、トナカイを二匹連れて
きた

「こいつらを連れていけ！ジュナとターニヤだ」

ノリオは思った

最新型でナビ付きなら

トナカイはいらないんじゃないかと

ダンジュラスは言う

「そんな事はない。

いくら最新型でもこいつらがいないとソリーは
進まないのだ。そうゆう風に乗ってあるのだ」

何故また何も言っていないのに答えられるんだと
思いながらダンジュラスに質問した

「どうしてですか？トナカイが必要な何かがあるんです？」

ダンジュラスは少し驚いた顔をしてた

まさかそんな質問されるとは思わない顔付きだ

そして答えた

「トナカイはクリスマスにぴったりだからだ」

「そんなに時間がたつぷりあるわけじゃないんだ、早く行ってこい！後はソリーが勝手に連れて行ってってくれるから」

上空に到達したら

この赤いボタンを押せ。

そしたら時間がゆっくり流れはじめる

お前が作る時間だけがゆっくり流れ始めるのだ

それがないとクリスマスに一気に子供達の家に行くのは無理だ。

行くのは家ばかりじゃないしな

いいか、この操作だけは忘れるなよ」

「はい！ダンジュラスさんありがとうございます！」

「じゃあ行ってこい！」

と、ソリーを外に出して

ノリオを乗せた。

「お前なら出来る！頑張れよ！」

大きな声だ

お世辞には弱いが

今まで会った人で一番まともな人に思えた

「ありがとうございます！」

雪の中ソリーはぐんぐん空に上がっていき、

小屋が小さく見えると

トナカイがさらに空に向かって走り始めた

いつの間にかもうノリオはサンタの気分だった

「早く、子供達にプレゼントを渡しに行つてあげたい」

ソリーは高く高く進んで行った。

第10章 クリスマスセンター(1/9)

ノリオはいつの間にか眠りに付いてた。

しばらく寝てなかったからぐっすり寝た

すると日差しが顔に当たるのでなんだろうと思って起きた

眩しくて最初は見えなかったがどうやら着いたみたいだ

ソリーから降りると

辺りを見渡してみた

他はなんにも見えないが

奥にでっかい工場みたいな所がある

そこに向かって歩いて行った。

地面がふわふわしてて

変な感じだ

ノリオは直感した

「雲だ。ここはまだ空で

周りの白いのは全部雲で出来てるんだ。

そしてここは多分おもちゃの工場とかだろう」

その時

ぱちぱちぱち

「よくわかったわね」

聞き覚えのある声の男が

近付いてきた

振り返るとそこには

カーキ色の上下のスーツを着た男が立っていた

「ミカエルさん？」

「大天使ミカエルよ、よくここまで来れたわね
褒めてあげるわ。

さ、時間もなししこれからやる事いっぱいだから
早く行くわよ」

「はい」

なんとなくもうやる事ってのはわかってたので
質問とかはなかった。

「ここはクリスマスセンターって言うっておもちゃ工場や世界中の子供達のデータ
や今までの履歴とかを管理してる場所が
集合してる所よ

それにしてもそのソリー、まさかあんたが乗ってくるとはね」

「ハハ・・光栄です」

少し坂を上がって
クリスマスセンターに入った。

思ったよりでかい
工場だ。

工場と言っても建物はかなりかわいい
建物自体の作りがおもちゃみたいだ

中で、次から次へと自動におもちゃが作られて行く
ソリーもいっぱいある。

これらのソリーを見ると
自分の乗ってきたソリーがいいやつだって事がよくわかる

カタカタカタ

おもちゃで出来た電車が
迎えにきた

ミカエルとそれに乗り込み、工場見学をする「すごいなあ・・」

「ここはおもちゃ工場で、その先にデータルームがあるからそこで
資料を見てちょうだい。
結構時間かかるから心してやってね」

工場の最後の方には
上下で赤と白のボーダーの服を着た小さな人が沢山いて働いてた。

何かをこねてデータを打ち込んでからそれを製造機械みたいな物にぶち込んでい
た

ノリオは初めて質問した

「あの人達はなんですか？」

「あれはヨーフと言ってここですずっと働いてるのよ。一年中子供達のおもちゃを作っているの」

「この気候に適した身体だけど残念な事にここでもしか生きられないのよ。それでも彼らはおもちゃを作る事が幸せなの」

「そうなんですか・・・」

ノリオは少しだけ寂しい気持ちになった

「世界では色々な景色があって色々な事があると言うのにここでもしか生きられないなんて・・・」

「この人達が気持ちを込めて作ったおもちゃを大切に配らなきゃ！」

そう思ってるうちに

終点に着いたみたいだ

クリスマスセンター(5/9)

資料室と書いてある

部屋の隣の会議室に

ミカエルと入る。

ミカエルはいつもと違った感じのはきはきとした声で挨拶をする

こんにちは

「ミカエルです！2007年サンタクロースを連れてまいりました！失礼します」

「あなた、失礼のないようにしなさいよ！思った通りしゃべればいいから」

ミカエルはこそこそ声でノリオに言う。

「は、はい」

カチャ

「失礼します！」

中には7人のおじいさんが座っていた
どの人もサントアみたいな顔してる

その中の一人が口を開く

「君がミタノリオくんかね？」

「はい！そうです」

「座りなさい」

長老「よく来てくれた。そしておめでとう。君の行動はここでずっと見てたよ
。本来ならここまで来るのは難しいはずなんじゃが、君はなんなくクリアしてきた

純粋な心を持ってたら

ここには来れる。

だが、純粹過ぎてもだめ

バランスがよかったのじゃよ」

ノリオ「嬉しいのですが、全く身に覚えがありません。なんかうまく行きすぎて
逆に不安でした。でも関わってるうちに早く子供達が喜ぶ顔が見たいって思うよ
うになってきました」

もう一人のおじいさんが口を開く

「君は向いてるよ。本来ならサントアになるには会議が必要なんじゃよ。

君は知ってるかい？

毎年夏にはコペンハーゲンで世界サントアコース会議が行われてるんじゃ。

国際公認サントアコース協会ってのがあって

その試験に合格した

エリートサントア予備軍の180人の中から更に

選ぶんじゃよ」

もう一人が言う

「君はその試験を受けずに、いきなり選ばれてしかも、

1番いいソリーに乗せてってもらい、てんのすけまで連れて来た」

ミカエル「て、てんのすけ？」

長老「お前には見えないんだろう、馬鹿者が。」

よくそれでここに残ってられるな」

ミカエル「すいません・・・」

ミカエルは小さくなって
ふて腐れた

ノリオは聞く

「どうして僕が選ばれたのですか？」

長老「お前さんの前任者のサンタクロースのヤマジダノスケが4年交代のはずなのに怪我をしおって、

それもお前さんの家の前で事故にあったのじゃ。

派手な事故だった上に薬の効き目も薄れてきてクリスマス前に飲み直す前の事だったんじゃよ。

大事には至らんかったが、今年サンタを努めるのは無理だと言う事で

お前さんを推薦してきたのじゃ。

知恵の薬には先を見通す力も備わってるから

ヤマジを信じたのじゃよ

ノリオ「そうだったんですか・・・そういえばなんかうちの前で事故があったのは聞いてます。

そして、僕はこの後どうしたらいいですか？」

長老「お前さんが行く場所はもう決まってる」

もう一人の老人が

読み上げる

「2007年サンタクロースミタノリオ今年の任務先は日本、カンボジア、イギリス、アフガニスタンで決定する！」

日本、カンボジア、イギリス、アフガニスタン・・・

最初は戸惑ったが、

ノリオは元気よく返事した。

「はい！ありがたく引き受けさせて頂きます！」

長老「今から資料室に行つて調べながら段取りを組みなさい。

プレゼントの選択はノリオにまかせる。

屋上にあるゼータに乗れば世界中どこでも調査する事が出来るから自由に使いなさい。

プレゼンティストを工場のヨーフ長に提出すれば

イブには出来てるから

早めに提出しておくれ」

もう一人の老人「子供達が笑顔になるように、全力を尽くして下さいね」

長老「ミカエル、コルバトウントウリに行つて

ノリオのサンタ衣装を貰つてきなさい。

ノリオにはそんな取りに行く時間はない」

ミカエル「はっはい！

ただいま！」

ミカエルはダツシユで

部屋を後にした

ノリオ「コルバトウントウリって何ですか？」

1番端に座る老人が口を開く

「フィンランドにあるサンタ山じゃよ。

サンタ衣装は毎年そこで作られてるのじゃ。

その近くのロバニエミと言う街は世界でサンタクロース村と言われてて、サンタクロース郵便局があるのじゃ。

そこに来た世界中の子供達からの手紙を

引き上げに行かなきゃいかんのだが、

まあそれはノリオの仕事じゃない」

ノリオ「サンタって北極に住んでるって聞いた事ありましたけどそうじゃないんですね」

長老「正確に言くと北極圏じゃ。ロバニエミは

北極の入口と言われとるからいつの間にかそう言われるようになったのじゃよ」

長老「さあノリオ、

クリスマスまで後1週間しかないんだ。

すぐ資料室に行ってやるべき事をやりなさい。

段取りが決まったらまた

報告にきなさい」

長老の隣の老人

「いいかノリオ。最終的にはしっかり自分の目でみた事だけを材料とし、自分の判断で動くんだぞ」

ノリオ「はい！よろしくお願いします。精一杯やらせて頂きます！失礼します」

ここからは一人だ・・

頑張るぞ！

本当に楽しくなってきた！

第11章 サンタ資料室(1/2)

ボタン

資料室に着いたノリオは

早速その壁中を埋めつくす本から

カンボジア、アフガニスタンの資料を探した。

日本とイギリスはなんとなくわかるから

先によくわからないこの

二つの国を調べよう。

カンボジア見つけた！

どれどれ？

あっそっかー！

カンボジアってアンコールワットの所だ

人口は1410万人、土地は日本の二分の一

なるほどね

こうゆうの調べるのって

楽しいなあ

中央にあるトレンサップ湖は琵琶湖の約10倍の広さで多くの人が湖上の家や船で暮らしている
理髪店、学校などの船もある

なんだか楽しそー！

でも仏教だから
クリスマスなんて関係ないんじゃないか？
まっいっか

次はアフガニスタンを
搜そう

あったあった

んー・

でもあんまり情報多い訳ではないんだなあ

アフガニスタン

人口2390万人

面積日本の約1・7倍

日本ではシルクロードで

ラピスラズリで繋がっていた。

ラピスラズリって石のラピスの事だよな？

国旗が黒と赤と緑で

なんかクリスマスみたいだな

ふむふむ、暖房器具の

サンダリはコタツとよく似ていて、煙のでない炭を使っているか…

アフガニスタンって寒いんだ

暑いのかと思ってた

なるほどね

これだけじゃわからん！

やっぱ直接行ってみるしかないよなあ

ってか行きたいし！

ワクワクするぜ

よし！屋上に行ってみよう

第12章 ゼータ(1/2)

ノリオは屋上まで行って
勢いよくドアを開いた

そしたらそこには

沢山のサンタ予備軍の
人が居て、

ゼータに乗る手続きをしていた。

白い布に白いターバンを巻いた人達の一人が
近付いて来た

「乗りますか？」

「あ、はい」

「少々お待ち下さい。あ、これ書いて下さい」

ボードに挟んだ紙には

名前と行き先を書く欄がある。

ノリオは4カ国全部記入した。

「この人達みんなサンタクロスなんだあ・俺こん中じゃかなり若いな」

「ミタノリオさーん」

白い受け付け士の一人に呼ばれた

「はいー」

「どうぞ、これにお乗り下さい。ゼータの乗り方はご存知ですか？」

「いえ、全く持ってわかりません」

「では説明いたします。

ゼータはソリーと違って

無重力置換装置で動きます。ソリーは時間がゆっくり流れますがゼータは時間を
左右する事は出来ません。

従ってスピードが重要となってきます。

と言う事は身体にすごいGがかかるので、この胴衣を絶対に脱がないで下さい。そして無重力って事は機内と外の重力の差が

激しく、かなり危険なので飛行中にドアは完全にロックされます。

その代わり、どこを飛んでも向こうには見えないし、吸音機で会話も聞こえます。
目的地まではデータを打ち込めば自動に行きますので、後はレバーで自由に操縦して下さい。

操縦席の上に簡単マニュアルがありますので、自動運転中にも読んでおいて下さい。

それでは行ってらっしゃいませ！」

ゼータに乗り込み、胴衣のベルトを閉めると自動的にエンジンがかかり、発車した。

すごいスピードだ！！

第13章 イギリスの子供達(1/9)

ゼータに設定した順番は

イギリス、アフガニスタン、カンボジア、日本だ。

イギリスかあ・・・

楽しみだなあ

もうクリスマスシーズンだから街も綺麗だろうな。

ノリオはワクワクしながら操縦席の上にある簡単操縦マニュアルをとった

「さっ、先は長い事だしのんびり説明書でも見るか」

と、その時！

ガクン

ゼータのスピードが落ちて音声が流れた

「目的地に到着しました♪」

「早過ぎじゃわ！！まだ出発して5分もたってないやんけ！！！」

そうだった
ゼータはめっちゃめっちゃはやいんだ・

ここはイギリスのどこだろう？

少し田舎な感じだ

ノリオはレバーを握りながら辺りを見回す

細い道に小さな橋がかかっててそこから見える景色は言葉を失うくらい綺麗だ。

写真家のように指で四角形を作ってみる

どこを抜いても絵葉書みたいだ。

少し進むと大通りがあって、イルミネーションで飾られた街のテラス付きのお店はビールを飲む人達で賑わっている

観光用か馬車まである。

ワッフル屋さんには並ぶ子供達の顔は幸せそうだ。

なんて美しい街だ・

ここはどこだろう？

ノリオはタッチパネルの

目的地説明って所を押す　しかし押しても中々反応がない
何度か押す。

「こわれたかな・・・？本部に連絡してみようかな？」

と、その時

「ココハベルギー、ベルギーです。ワッフルやフリスクをかうならここがベンリ
デス

ヨリミチはコレデオシマイ」

そう言うと

また空中に上がり、
急発進した

「間違えたな・・・」

目的地に到着するのに2分かからなかった

「早過ぎだろ？これ胴衣来てなかったら身体ばらばらになりそうだな」

町並みはさっきと違って
都会な感じだ。

最初に着いた場所は海があって橋がかかっている
これはよく見た光景だから今度こそ着いたのだろう

橋の麓では沢山の人達が
賑わっている

日本人も沢山いるので
多分ここは観光地だろう

ノリオはレバーを引いて違う場所に向かう。

「そうだ！一度行ってみたい場所があったんよなー」

タッチパネルに打ち込んだのは

「ABBY LOAD」

THE BEATLESで同じみの街だ。

ゼータはイギリス国内なのかそこまでスピードあげずに進む。

駅らしい場所から真っ直ぐくだったって行くと

見た事のある風景が！

音声なくてもわかった

アビイロードだ！！

憧れのアビイロードについて来てしまった。

アビイロードの横断歩道にはビートルズTシャツを売ってるおじさんが
寒そうに立ってた。

この時期にTシャツ売るなよ・・・

町並みは完全にイルミネーションで飾られ、

まさか自分が今アビイロードにいるなんてまだ信じられなく、

今ここでジョン・レノン

の「HAPPY X'masWAS IS OVER」が流れたら

きっと感動して泣くだろう

そしたらその時に
ゼータが起動し、

「So this is X'mas♪」
ジョンの声だ！！

ノリオは涙を拭った

「ゼータのやろう・・・頼んでもないのに粹な事してくれるじゃねえか」

ノリオははっと気付いた。

俺にとってのビートルズも子供達にとってのサンタクロースも同じなんだ。

彼らが沢山の人に夢を与えたように

俺も与えられた任務をちゃんとこなさなきゃ！

ここで観光してる場合じゃない

ノリオはレバーを引いて

ゼータを走らせた
。

ロンドンの田舎の街にきた

ずいぶんかわいい家が多いんだなあ

一つ思った。

なんかイルミネーションが景色と自然に溶け込んでて嫌味じゃないのだ。
ぐっと心が動かされる感じがした。

新宿とかがいくらイルミネーションで飾っても

この外国の田舎の家の
イルミネーションには

勝てないと思った。

その家の一つにスポットをあて、家をすりぬける機能と吸音機能を起動させてその家に近づく。

想像した通りの光景だ。

お母さんはちようど

子供を寝かせる所だ。

優しい表情でクリスマスの絵本を読んであげてる

子供がお母さんに言う

「サンタさんはここに来てくれるかなあ」

「もちろんよ。その代わりちゃんといいい子にしてなきやダメよ。パパの言う事もちゃんと聞くの」

「サンタさんってどんな恰好してるの？」

「真っ赤な上下のコートをに真っ赤な帽子をかぶってて黒い長靴に金のボタン。あごには真っ白なおひげが生えてるの。」

優しい顔なんだよ
お鼻も真っ赤なの」

「わあ会いたいな会いたいな」

ノリオは聞き耳を立てながら思った

「まさかそのサンタが
今日の前にいて茶色のトレーナーに
いけてないジープンはいてるなんて思っ
てないよなあ・・・当たってるのは
真っ赤な鼻だけじゃねえか」

そうして次の家に向かう
次の家でも同じような
光景だった

子供達は遅くまで起きててジングルベルを歌ってる

そうだよな
俺もクリスマスは
クリスマス前の一週間で
一番楽しかったもんな

子供達は幸せそうな顔だ

そんな顔見ると
こっちまで幸せになってくる

イギリスの子供達は

おもちゃで十分喜んでくれるな

どんなおもちゃがいいかな？

でもほしいものあげたいからクリスマス前にはもう一回来て手紙を回収してまわらなきゃ

よし！

イギリスはなんとなく

わかった！

次はアフガニスタンだ！

第14章 カンボジアの子供達(1/9)

次はアフガニスタンと・・・

ノリオはタッチパネルに目的地設定をもう一度押す

ちょっと待てよ

やっぱり旅行とかで

行けない所を楽しみにとっといた方がいいよな？

やっぱカンボジアから行く事にしよう！

ノリオはタッチパネルに

設定しなおす

機械「カンボジアセッテイシマシタ」

こうゆう音声メッセージは一人にいる時に聞くのは怖いかも・・・

よし出発じゃ！

ゼータは空高く舞い上がり、勢いよく飛び出す

ノリオは操縦席の上の

簡単操縦マニュアルを取ろうとする

ガチャン

「モクテキチニトウチヤクシマシタ」

早いわ！早過ぎるわ！

ワープじゃんほとんど

まあいいや
って言うか星綺麗だな
東京でこんな星見た事ないや

よし！

早速子供達の家に行ってみるか

辺りを見回すが真っ暗でよく見えないので
だいたいの感で家に入っていく

すると、一つ目の家でも

もう子供は寝てて、

二軒目も三軒目もみんな寝ちゃってるのだ

カンボジアの子供は寝るのが早いのかなあ

さっき何げに見つけた

タッチパネルのヘルプを押す

機械が作動

機械「ドウサレマシタカ」

ノリオ「子供達みんな寝ちゃってるんだよー」

機械「カンボジアニハデンキガナイトコロがオオイカラ・・・」

「びっ」

読みにくいからノリオは音声変換のボタンを押す

機械

「この場所は特にそうだけでも、カンボジアには電気がない場所が多くてな、学校も太陽と同時に始まるし、塾は5時とか学校の前にやるからみんな早寝なんよ」

ノリオ「そうなんだ」

こんなにスラスラしゃべれるなら最初から

こっちにしろっちゅうに

ちとフレンドリー過ぎるけど・・・

そっかあ

じゃあ明日の夜までまつか！

俺も眠いし

よし今日はここで寝よう

カンボジアで一晩迎えるとは思わなかったけど！

じゃあおやすみ

機械「ゆっくり寝ろよ」

ゼータ機内に強烈な日差しが射す

ノリオは目を覚ます

うわ

初めて見るカンボジアの光景に感動する

太陽はここから昇るんじゃないかと思うくらい美しい

東京では味わえない

「大地の目覚め」が

ここに存在する

街中には市場があったりで結構賑わっている

ノリオは子供達を見たいので学校に移動する

へえ

みんな元気いっぱいじゃん！

でもなんで学校に政党のポスターとか看板があるんだ？

機械「この学校は寄附されたものだけど、政治宣伝に使われちゃってるのも事実なんよ。まあ学校がないよりはいいけどなんだかね」

いや

機械もちゃんと人並みに考えてるんだなあ

機械さんの名前なんちゅうの？

機械「モリオです」

モリオ？俺ノリオ！

似てると呼ぶのちょっと恥ずかしいけど

まあいつか

じゃあモリオ、カンボジアについて色々教えて
くれな
よろしく

OK！

モリオ「この学校はまだいいよ。

カンボジアはやっぱり裕福でない子供が多いから進学が送れたり、学校だって行
けない子供がいたりするんだ。

カンボジアの子供は

かなり勉強好きだよ

この学校の子供の二割が

将来日本語の先生になりたいって言ってる。

何故ならここは日本人が寄附したから。

だから子供達のこの想いを大切にしてあげてほしいよね」

とても機械とは思えない

素晴らしい意見だ。

モリオ「よし！他の学校に行ってみよう。」

完全主導権はモリオだ

今度は学校と言うよりは

外の教室で

机と椅子だけがある場所で生徒9人が勉強してた。

その中に足のない子供がいる

ノリオ「あの子はどうしたの？」

モリオ「地雷だよ。聞いた事ない？」

ノリオ「テレビで見た事ある！あれカンボジアだったの？」

モリオ「この国の地雷の

問題は難しい。

知ってるか？地雷は埋めるのに一つ300円。撤去するのに10万円かかるんだ
よ」

ノリオ「えー！！それ知らなかった・・・」

この国の財政じゃ絶対無料じゃない
なんとかしようよ！」

モリオ「簡単に考えちゃいけないのだよ。
実際の話。」

地雷の被害は絶対に許せない事だよ

なんで犠牲になるのはいつも関係のない人達なんだって思うよね。

でも実は地雷はテレビで報道されてるよりは減ってきたって話。

でも地雷がなくなってる

地雷注意の看板が取れたら今度はその土地を

金持ちが買いあさりに

来るからそこ周辺に住む 貧しい人達は

それはそれで迷惑だから

看板がはずせなかったりするんだ。

そうゆう難しい事実をカンボジアは結構かかえてるよ・・・」

ノリオ「そうなんだ・・・

他の事も教えて。もっと知りたい！」

ゼータは街の外れを進んでいく

モリオ「ノリオ見てみな、あの道路。

あれ日本が作ったんだよ。

でも便利になるのはいい事ばかりじゃないんだ

道路が出来る事によって

密林者が増えたり伐採が

増えたりで

貧しい人の生活が

余計に苦しくなる事も

あるみたい

やってあげるだけじゃなくて、その後の事もちゃんと考えてあげないと

行為が台なしになったりもするからね」

ノリオ「なるほどねそりゃあそうだよね・・・

暮らしが余計にきつくなったらどうしようもないもんな」

ノリオはさっき元気よく走り周ってた子供の顔や、足のない子の顔を思い出して
た

世界には色んな子供がいる

もっと知らなきゃ・・・

よし！

次はアフガニスタンに行こう！

ノリオはすばやく
目的地設定をした

出発ー！！

第15章 アフガニスタンの子供達(1/9)

到着！！

俺の身体大丈夫かな・・・
明らかにこんなスピードに乗ってたらやばいだろ

「ん？」

ノリオは辺りを見回した

「・・・なんだこれ」

見渡す限りになんにもない
砂埃が舞ってる中道路らしきものが一本走ってるだけ

「また間違えたのか？」

モリオ「間違ってるよ。ここがアフガニスタンだよ。
ノリオ、今回は特に心して見ろよ。世界の現状が痛いくらいわかるから」

ノリオはなんだか予想できた。
さっきよりひどいのかも
しれん

ゼータは辺りを見回すかのようによくりと進んで行く

ノリオ「たまに転がってる鉄くずは何？」

モリオ「戦争だよ。
アフガニスタンの戦争事情は最悪だよ」

ノリオの予想は当たった
ゼータはゆっくり進んで行く

しばらくすると少しずつ建物が見えてくる

しかし崩壊してる建物ばかりだ。

その崩壊してる建物の中に家族らしき人達が住んでるみたいだ

だんだん人も増えてきた

人が増えれば増えるほど、建物が増えれば増えるほどこの国の事情が痛いくらいに伝わってくる

ノリオは言葉を失ってた

モリオ「1969年のソ連進攻以降、ソ連対ムジャヒディン、ムジャヒディン同士の戦い、

タリバンの台頭、北部同盟対タリバン、アメリカの空爆って30年以上も

ここにはミサイルが降り注いだからね

この国の被害は半端ないよ

そこの原っぱみて「らう

地雷原って呼ばれてんだよ

「え??地雷注意とか書いてないじゃん!ここってさっきに比べたら人だっただいし、子供間違えて入っちゃうよー!」

モリオ「ここの子供はここが地雷原ってぐらいみんな知ってるよ

ただ地雷の量はカンボジアより遥かに多いから危険だけだね

ここはこれでもカブールから車で10分くらいの所だよ」

ノリオ「カブール?」

モリオ「知らんのか?首都だよ

首都から近いここでも

状況はこれだぞ」

ノリオ「・・・」

そんなにひどかったとは・・・

いつの間にか夕方が忍び寄り、どこまでも広がる空はだんだんと青紫を帯びてきた

アフガニスタンの夕暮れはすごく綺麗だ
綺麗だからこそ、悲しみが込み上げてくる

モリオ「ユニセフは現地スタッフと合わせて
4000人くらい
来てるんだけど
全く追いつかないんだって

国連が出した調査は
信じられない事に

飢えに苦しんだり病気で苦しんだりしてる子供はの数は

12万人だって」

ノリオ「12万!!」

そんなにいるの？

こうしてる間に大切な命がどんどん無くなって行くんよね？

これは一刻を争う問題だ

一体自分に何が出来るだろう・・・

モリオ「地雷、飢え、戦争、疫病、貧困、どうして同じ人間なのに片方は
裕福に暮らせて片方は
こんな目に合わなきゃいけないんだろうね。

アフガニスタンは出産の施設が整ってないから
6人に1人は生まれてすぐ命を落としてるんだよ。
運よく生き残っても
ポリオにかかったら助からないし」

ノリオ「ポリオって？」

モリオ「小児麻痺の事だよ。これにかかるとほとんどの子供が助からない」

水もない、電気もない

一体何を楽しみに生きてるんだろう

その中子供達は どうして

あんな笑顔が出来るんだろう・・・

その日の夜ノリオはなるべく沢山の家族をまわった。

もう自分がサンタクロースって事なんてとっくに忘れていた。

昼に通った廃墟に住む家族の所へ再び向かう。

アフガニスタンの夜は

闇だ。暗闇だ。

明るい夜に慣れてる自分にとってはこんな所に人がいる事に抵抗がある。

それは自然の暗さとは違う。中途半端に人間が作ったものがあるから余計に不気味な暗闇に感じるのだ。

ノリオは家に近付いてみる。

子供達の声がする

「寒いよ お腹すいたよ」「ごめんね・・・もう食べるものはないんだよ。もう少し我慢してね。ごめんね」

別の子供もいるようだ

「お母さん僕学校に行きたい！お願い学校に行かせて。勉強してみんなを助けたんだ」

「よく聞いて。明日になればもうここは出なきゃいけないの。

ここも爆弾が落ちるかもしれないんだって

次行く所に学校があったらいいね」

「お腹すいた・・・」

もう一人の子供は

泣いている

お母さんは涙を必死でこらえてる

必ず戻ってくるから

ノリオはそう決めて後にする

どこに行ってもそんな会話ばかり・・・

「いつになったら戦争は終わるの?」

「どうして人を殺すの？」

「世界中の人みんなこんなに苦しいの？」

「僕死ぬの？」

ノリオの頭の中には

子供達の声はずっとぐるぐる回ってた

モリオ「ノリオ、アフガニスタンの子供達が1番怖いものってなんだと思う？」

2番が暗闇で3番が地雷、4番が爆弾、5番が

銃を持った人だよ

これはボランティア団体が調査した結果なんだ」

ノリオ「それ以外になんだろうか？全く思い浮かばない」

モリオ「幽霊だよ」

ノリオ「幽霊?!?!？」

モリオ「やっぱり子供は子供なんだよ

目の前にある爆弾や銃を持った人よりも死んだ人の方が怖いんだって。

そこは世界中の子供が同じなんだろうな」

ノリオ「大人の俺でもこの闇の廃墟は怖いのに

子供にとったらどれだけ怖いかな」

ノリオはクリスマスを何も考えずに楽しもうとする自分と普段ダラダラと過ごした自分を恥じた。

そして二度と忘れないよう、この景色を目に焼き付かせてからアフガニスタンを後にした

次は日本だ。

久しぶりに帰る日本。

なんだか怖い

そんな想いのまま

ゼータを日本に走らせた

ゼータは

容赦なくノリオを日本に返した。

普通旅をする場合はゆっくり時間をかけて

行き来するので、本当なら今頃ぼーっと考え事を

してる時間のはずだった。

この瞬間移動に近いスピードは現実を痛いぐらいにたたき付ける効果があった

久しぶりの日本なのにちっとも嬉しくなかった

新宿の街

眩しい夜

ネオンの数

酔っ払い集団

賞味期限がきたら

あっさり廃棄される

コンビニ弁当

当たり前に思ってた景色がどうしてこんなに苦しいのだろう・・・

自分は今まで何してたんだろう

ゼータをそのまま走らせ、住宅街に行く

庭にクリスマスデコレーションされ、玄関にリーフが飾られた家に入ってみる。

木の香りに包まれてそんな子供部屋で、お母さんが子供を寝かせてる最中だった

「お母さん」

「どうしたの？」

「今年はサンタさん来てくれるかなあ？」

「いい子してたからきっと来てくれるわ。何がほしいの？」

「僕へリコプターのラジコンがほしい！」

「ラジコンはこないだ買ってあげたばかりじゃない」

「あれは車のラジコンでしょ？僕はへリコプターのがほしいんだ！」

「わがままな子ね。多分サンタさんは聞いてくれるわよ」

絵に書いたような幸せな
家庭だった。

今まで見てきた

当たり前のクリスマスだ

ノリオは日本はこの家族で十分だと思い、

クリスマスセンターに戻る事にした

第17章

帰還(1/5)

クリスマスセンターに戻ってきたノリオはくたくただった

「俺は一体どうすればいいんだろう・・・」

あの子供達の顔が忘れられなくて

しばらく外でぼーっとしていた

その時に耳元で声がした

聞いた事ある事だ

「おもちゃで作っちゃえ」

ノリオ「おもちゃ？なんだそりゃ？」

「・・・」

「ん・・・？」

「出来るかも！！！！」

ノリオはすぐ立ち上がっておもちゃ工場に駆け込んだ

ひたすら作られていく

おもちゃの数々

ただでさえ騒がしい現場はクリスマス前で余計に
殺気立ってる感じだ

ノリオはそこにいるヨーフの工場長に話しかける

ノリオ「こんにちは」

ヨーフ「戻ってかたか。どうだった？ノリは珍しい国選択されたね
普通先進国と発展途上国を混ぜたりはしないんだけどね。」

ノリオ「そうなんだ・・・でも見れてよかったですよ。そこで相談んだけど」

ヨーフ「どした？」

ノリオはなんて説明したらいいか一瞬戸惑った

ノリオ「この工場ってなんでも作れますか？」

ヨーフ「なんでもってわけじゃないけどだいたい作れるぞ。一体何を作りたいんだ？」

ノリオ「地下シェルター

ロボット先生付き巨大図書館」

ヨーフ「は？なんだそりゃ？」

ノリオ「イギリスや日本の子供はおもちゃで喜んでもらえると思うんです。もちろん色んな家庭がありますから、そこは考えつつですが

カンボジアやアフガニスタンの子供達には
おもちゃじゃなく、

違った形のプレゼントがしたいのです

一時的な喜びじゃなく、

自分達の手で生きて行く事の出来る知恵が学べる

場所をクリスマスにあげたい」

ヨーフ工場長は突然の

ぶっ飛んだ話に真ん丸な目をもっとまんまろく
させていた

ノリオ「アフガニスタンに限っては戦争の被害に合わないよう、シェルター代わりになるような頑丈な作りにはしたいです。

そして各教室があって
ロボットの先生がいて

子供達はそれぞれ自分が

将来やりたい事を勉強する。

それぞれのプロフェッショナルを育てて

自分らの街を自分らで

作れるようにするんです。

しかも地下は温かいから
寒さの対策にもなりますし！」

ノリオは真剣に語った

ヨーフ「それは難しいな。それだったら国全部に作らなきゃいけないし、それならヨーフをその場所へ派遣しなきゃいけない。でもここで働くヨーフは5000人で毎年のクリスマスのおもちゃ作りで手一杯なんだ。

とてもじゃないけど、派遣は無理だ。しかもヨーフはここでしか生きられない」

またノリオの耳元で

囁く声があった

「森を起こしちゃえ」

ノリオ「・・・!？」

そうだ！僕、もう一度スリフォレに行つて人材を頼んできます！

向こうで子供図書館を作れる人材を用意すれば

やってもらえますか？」

ヨーフは目を真ん丸にさせてびっくりしたが
少し考えて答えた。

ヨーフ「それがノリオに出来るのか？」

出来たとしても地下に作るなら巨大な穴を掘らなきゃいけない。

それだけで膨大な時間と労力があるだろう」

穴掘り・・・

その時にまた耳元で声が聞こえた

「地雷原に作っちゃえ」

地雷原・・・？

「・・・」

ノリオ「それなら方法があります！」

地雷原に埋まってる全部の地雷の威力を5倍くらいにして

まとめて爆発させてしまえばいいじゃないですか。透明になれる技術があるんで

すからそのぐらい出来るでしょう！
そしたら地雷被害が減るし、その技術を使えるようになったら地雷撲滅が出来ますよ！」

ヨーフ「なるほど・・・
それぐらいはこの技術を使えばたやすいもんだ。ノリオ、お前のそのアイディアはどこから湧いてくるんだ？」

ノリオ「困った時は耳元で声が聞こえて方法を教えてくれるのです
すごい不思議なんですけど・・・」

ヨーフ「あ！なるほどね」

そう言うとヨーフ長はノリオの肩に向かって
吠えた

「こら！てんのすけ！！！！！」

「うわあ！」って肩から
転げ落ちて姿を現した

てんのすけはささっと逃げていった

ノリオ「そっか・・・てんのすけずっといたんだ。聞いた声だと思った」

ヨーフ「他のやつらには
幸せを運ぶ妖精かもしれないんがあいつはここに来ると悪戯ばかりしやるから、
捕まえてケツ引っ張たいてやった事があるんだよ
だから姿を見せなかったんだろう
でもあいつが力を貸すんだからノリオは本物だ

わかった！
そのことも図書館を
作ってやる！

カンボジア、アフガニスタンに30ずつ
それ以上は無理だ！

ノリオはどこに手配するか場所を決める

いいなー！」

ノリオ「ありがとうございませす！...！」

ノリオは嬉しさと胸がいっぱいだっ

絶対に成功させてやる

もう時間がないから

すぐにでも動かなきゃ！

ノリオはまた屋上のゼータの場所へ行き、

受け付けの白い衣装を来た人間に問い合わせる

白い男「乗りますか？」

ノリオ「モリオって名前のゼータはありますか？音声機能を切り替えたらモリオって名乗ってたのです」

白い男「ああ、どれに乗っても大丈夫ですよ」

ノリオ「いや、それじゃあ困るんです！

モリオとは色々話したのでまた彼と話したいんです、お願いします」

白い男「ゼータのデータは一律で共有しています

だからあなたとの会話も全部のゼータが記録してるのでどれに乗っても大丈夫です。ここに名前と行き先を書いて下さい」

ノリオ「そうなんですか、そりゃあすごい

あんな人間チックなのに

やっぱり機械なんだねえ」

名前を書き込み、行き先を「Sleeping-Forest」ってだけ書いてゼータに乗り込む

ソリーでも行けるのだが

気分的にクリスマスイヴまで取っておきたい

ゼータを起動させる

「アリガトウゴザイマス、イキサキハ・・・」

すぐに音声切り替えを押し、モリオを呼び出す

モリオ「ノリオか？」

ノリオ「モリオ、相談があるんだ！

実はカンボジアとアフガニスタンの地下に

でっかい施設を作る事になってその人材が必要なんだ」

モリオ「また・大胆な発想だなあ
何をやるうとしてるんだ？」

まあ人材だったらオルバの所だろうな」

ノリオ「オルバ？」

モリオ「南のスリフォレの王だよ。そこは完全な王国だから人はいっぱいいるよ
ただ・・・」

ノリオ「ただ？」

モリオ「今までのようにすんなりとはいかないぜ普通に考えたらいきなり人をか
してくれって言うて貸してくれる王様が
いると思うか？」

ノリオ「熱意を込めればわかってくれるさ！」

モリオ「しかも南のスリフォレは唯一クリスマス
を意識してない場所だからスリフォレの中でも孤立してんだよ
オルバの誕生日がクリスマススイヴなのが問題なのかもしれん。

自分の誕生日に世界中が

クリスマスで盛り上がるのが気に入らないんだよ」

ノリオ「ただわがままなだけじゃん」

モリオ「まあそうだけど、そのわがままな王にどうやってクリスマスに動いても
らうんだ？」

一応会えるようにメールは入れとくけどね。

ノリオは会えるには会える、サンタクロースになる人間を無下に扱うのはタブー
とされてるから」

ノリオ「サンキュー！オルバは俺がなんとかするさ」

スリフォレに行くのは

イギリスに行くのとは訳が違う

特殊な場所にあるからすぐには着かないのだ。

一体どうやってここまで来たのだろう

いつの間にか辺りは
朝の光が射している

まるで時間が遡った感じだ

今までのスリフォレと違って光が行き届いてる

森の向こうにはキラキラと輝く海もある

その海沿いには

真っ白な城がそびえ立っている

モリオ「着いたぞー」

ノリオ「すごい所だね

なんか自信なくなってきた」

モリオ「ここまで来て何言ってた？とっとと行ってこい」

ゼータは城の近くに着陸し、ノリオは外に出た。

でっかく構えてる門は

普通の城の門より遥かにでかい気がする

「なんだこの音楽は？」

城の中からパレード音楽の音が

すると門が開き人が沢山出てきた

みんな派手な衣装で顔にはペイントしている

いつの間にか城の外にも人がいっぱい

何かのお祝い???

祭??

とにかく人だらけだ

近くの人に聞いてみた。

「これはなんの祭ですか？」

「王様の誕生日パレードだよ。一週間ずっと続くん

そしてその中の二日だけ王様がパレードに出てくるんだけど、その日だけ食べ物や仕事優先券や色んな物を配るんだから毎日来なきゃいけなくなるんだ迷惑な話だけどね」

ノリオ「・・・それは困った王様ですね」

村人「本当はみんな働きたいし、クリスマスだって何かしたいよ」

ノリオ「そうですね、ありがとうございます。また会える日まで!」

ノリオは時間がない事に気付き、急いで城の門をくぐる

入口にいる少し偉いっぽい人に話しかける

ノリオ「2007年サンタクロースに選ばれたミタノリオと申します!
今日はオルバ王に会いにきました」

「はい!ただいま!」

驚いたように姿勢正しくなるその人を見て
自分の権力と名声に
少し酔う

「やっぱサンタってすげえんだな」

王の部屋に案内される
途中に案内人が言うには
王様はとても偉そうで
権威を見せつける性格で
国民も家来も困ってるとの事

ノリオが気分を害さないか心配していた

何故ならクリスマス嫌いだから

話してるうちに王の部屋の前に着いた
とにかく派手だ

龍のドア金を叩き

「開門!!!」

の言葉と同時に開く
同時にパレードの音楽も鳴る

「時間ないから早くしてほしいのに・・・」
ノリオはつぶやく

王の登場だ

聖歌隊の喜びの歌、
音楽はMAX

盛大な拍手と同時に
ついにオルバ登場

派手な飾り付けに王冠
昔のエジプトの王をモデルにしたのだろうスタイルである

ノリオ「2007年サンタクロースに選んで頂いたミタノリオです！」

オルバ「君がミタノリオか。面をあげい」

面を下げた覚えはない

オルバ「サンタか何か知らんが俺には関係のない
事である。」

見たか、この国民の笑顔を
誕生日だからこそ
喜ばせてあげればならぬ
笑顔絶やさない一週間にするのだ」

ノリオ「王様に提案があつて来ました」

オルバ「提案？君がか？」

ノリオ「クリスマスに関する事ですが・・・」

オルバ「くだらん。クリスマスイヴは俺の誕生日だ。クリスマスの要素を入れる
つもりはない。」

ノリオ「王様の権威が今よりあがります」

オルバ「聞かせるのだ」

いい子になったオルバに
ノリオはゆっくりと話す

「現実の話クリスマスは
このスリフォレにとっては重要な行事である事の実は変わりません。
したらば、国民の中には
クリスマスを祝いたい人もいますでしょうし、
王様の誕生日一色に染めてしまうには後々の
王様の名声に響く恐れがあります。

そしたらどうしたらいいか

答えは簡単です」

オルバ「答えはなんだ？」

「王様の誕生日とクリスマスをコラボレーションしてしまえばいいのです。
王様は12・24日クリスマススイヴにお生まれになりました。

言わば、クリスマスの申し子です。

スリフォレでこれを利用しない手はないでしょう

避けるのではなく、取り入れて権力を高め、国民に提示するのです。」

オルバ「どうすればいいのだ？」

「今回お話にあがったのは、私がサンタになった第一の仕事の話なのですが、世
界の子供達の中には裕福でない、食べものもろくに食べられない
子供が沢山います。

僕が担当したのは日本、イギリス、アフガニスタン、カンボジアですが最後の二
国の地下に

巨大図書館を作ろうと思ってます。

子供達に食べ物を与えるのではなく、

生きていく技術をプレゼントするのです。

それには基盤作りに沢山の人が必要なのです

それを王様が先頭切ってやれば、必ず歴史に残り、代々語り継がれるでしょう。

クリスマスは国の税金還元の日。

何故ならあなた様の誕生日だからです。

パレードにかかる費用を

工事人件費にまわしてあげれば、

国民は喜びます。

金が無駄にならないからです。

国民の喜ぶ声、世界の子供達の喜ぶ声、明るい未来、この事業を成し遂げたならば、

あなたは今までのどのサンタクロースよりも
崇高でスリフォレ4国に永遠に語り継がれる
名君として刻まれる事でしょう。

クリスマスはあなたのものです！！

ついに獅子が目を覚ます日が来たのです

さあ、立ち上がりなさい永遠の名君オルバよ」

オルバの背中は奮え、

感動にしばらく動けない様子だった

オルバ「すぐにとりかかろう！国民全員集めろ！

パレードはやめだ！

費用は全部工事にまわせ！今回ゼネコンは使うな！国民主権工事にしろ！

ノリオ、ありがとう。

やっと目が覚めたよ

こんなに心が激しく燃えたのは久しぶりだ

クリスマスを疎遠してた事、実はずっと気掛かりだったんだ」

オルバは城の外に国民を集め、演説の準備を行う

歴史に残る日なので

リハーサルも入念だ

なんて単純な王様だ・・

ノリオは一仕事終えた

コーヒーをすすっていた

第19章

オルバ王名君への道(1/3)

城に集まった国民は

またオルバが何かしでかそうとしてるのが怖くてしょうがない感じだ

村人「なんの集合だこれ」

村人2「また無茶な事言い始めるんじゃないか？俺なんかパレードで仕事出来ないからどうやって食っていくのか心配だよ」

村人3「あれ?? オルバだ、何故？」

オルバ登場に音楽がないのが不思議なようだった

オルバ「国民の諸君！

オルバだ。よく集まってくれた。

今日の宣言をよく聞くように！
そしてその宣言を永遠に
語り継ぐように」

ノリオ「お、おい！何考えてんだこいつ、自分で言うなよ」

オルバの後ろにいたノリオは王様の裾を引っ張り、振り返ったオルバに
ウィンクしながら首を細かくふるダメダメ光線を送った。

オルバは首を縦に細かく

動かすOK光線を送ってきた

こんな事なら台本も全部書いとけばよかった

オルバは続けて演説する

オルバ

「皆のもの。」

今日の日よりこの南のスリフォレにクリスマスを
解禁する！

そのクリスマス第一の行事として皆に仕事を与える

内容は子供の為のことも図書館建設だ。

全員に給料を支払い、

食事を付ける。

クリスマスは毎年同じく

皆に特別な仕事を与える

子供に笑顔が帰ってくるよう心してやれ！」

やったー！！

最高！！

喜びの事があちこちからあがる

ノリオとしてはこのチープな演説に台本を自分がかければよかったと後悔していた
が、

まあ国民が喜んでるならいいだろうと

ほっとしていた

その時、突然国民全員が座り込んで頭を下げた

「てんのすけ様だ！！」

「てんのすけ様だ！！」

次から次へと聞こえる声

気がついたらオルバも頭を下げていた

ノリオ「オルバさんどうしました？」

オルバ「あなたの肩に乗っておられる方はこの国の守り神様でございます。」

てんのすけ様と一緒におられるなら先に言って下さればよかったのに

てんのすけ様、初めてお会い出来て光栄です」

てんのすけはノリオの肩の上からほんのり頬を赤く染めて国民に手を振って言葉を放った

てんのすけ「がんばってね・・・」

「ははー」

国民は次から次へと皆再度頭を下げる

ノリオはてんのすけに話しかける

「あんたすげえんだな。いつも助けてくれてありがとな」

てんのすけははにかんだままじっとしてた。

工事はすぐさま行われ、
オルバ王の熱意もあって
基礎工事は次から次へと
終わっていった

一方クリスマスセンターのおもちゃ工場でも
地雷爆発装置を開発し、
基礎工事前に地中の地雷を全て爆発させてしまい、ロボット先生や母体コンピューター「マーム」の製造、やっぱ人間の教師も必要だと言う事で
優秀な子供をさらに育成する教師プログラムもロボットに組み込んだ。

女の子の水を組む作業にかかる時間を節約し、その分勉強が出来るように、地雷爆発時に出来たの1番深い穴に井戸掘りロボットを設置した。

電気は全てソーラーシステムにし、巨大蓄電器を設け、貯まった電気の売買システムも図書館内に
設けた。

食事全面普及と言うオルバの計らいも意見として出たが、国が命を取り戻すには自分の力で切り開いて行く事が大事で、

そのお手伝い以上の事をし過ぎてはいけないという
ノリオの強い意思があり、最小限に押さえた。

大事なのは早く家族を守りたいと言う強い気持ちだ

その気持ちたちが勉強をはかどらせ、子供を短時間でそれぞれのプロに育てあげる

ただ、オルバに薬だけは

大量に寄附してもらった。命に代わるものはないし、この国には時間がないから
だ

子供達の中から
一流のお医者さんが生まれる事を願いながら

ノリオの2007年サンタクロースとしての準備は
全て整った。

第20章 クリスマスイヴ(1/3)

12月24日

アフガニスタン

この土地にとってクリスマスなんてただの冬だ

特にこの日の夜は寒かったが、偶然この日乗り越えられなかった人はいなかった
た

ここの集落で一番に気付いたのは、あの廃墟に住んでいた男の子だった

その男の子が朝起きると

目の前に

一枚の赤い封筒が

置いてあった

「なんだこれ？」

男の子はこぼれるくらい大きな目をこすりながら
封筒を開けた。

中には

「こども図書館ご招待券」と書かれたカードが入ってあった

「図書館!!!!!!」

子供は飛び上がった！

子供に疑う気持ちなんてない
そのカードのかわいいつくりで、何かすごい楽しいものが待ってる事くらい容易
に想像出来る

子供は勢いよく
外に飛び出した

「なんだろう、何があるんだろう」

そこはまさに初めて見る光景

怖くて誰も近寄らなかった地雷原に沢山人がいる

子供達が並んでるのだ

ワクワクドキドキしながらそこに走っていくと

地下に向かう階段があり、奥には自動改札みたいなゲートがあつてその招待カー
ドを入れると開くようになっていた

図書館はかなり広くて

色んなジャンルに分かれてる

医者、農業、財政、警察、行政、整備、アーティスト、などなど様々なジャンルの
勉強が出来るようになっていて、
得に難しい医者とかは

ロボット先生が随時待機して教えてくれるようになってる。

お医者さんになって

早く沢山の人を助けてあげたい

この想いが強かった少年は迷わずその教室を選んだ。

ロボット先生は各2教科までしか教えてもらえない。

早く確実にそのジャンルのプロを生み出す為に徹底して教えこまれる

図書館内には水タンクもあり、水は自由にそこら組む事が出来る

実験室では羊や牛などの家畜に関する研究も出来る

そこまで大きくはないが

サッカーが出来るくらいのスペースもある

シュミレーション用の
病院もいざとなれば
ちゃんと使えるような設備が整ってる

この巨大学び屋レジジャーランドに皆胸踊る気持ちでいっぱいだった
てんのすけの像もある
が、子供達は謎の生き物が理解出来ず、落書きをしてしまった。

カードのデータを全図書館に共通させたので遊牧人でも大丈夫なシステムになっている

戦争に巻き込まれた時にもビクともしないぐらいの頑丈な作りになっている

施設にヨーフの最高の技術を駆使した最新アンテナが着いていて、
戦闘機や爆弾を積んだ飛行機や銃が近づいたら

子供達のカードをバイブレーションを鳴らす危険お知らせ機能もついてある

戦争のない自由な国作りをする為の授業は2教科以外の必須科目であり、
これを受けるとお菓子がもらえるシステムになっている

早くこの子供達の中から
それぞれのプロが生まれますように

ノリオの想いがぎっしり詰まったことも図書館は
子供達の夢を乗せて
クリスマスイヴにオープンした。

第21章 サンタクロース(1/3)

世界中がクリスマスイヴ
街中イルミネーションで飾られ、
どこのお店でも鳴り響くクリスマスソング
幸せそうにプレゼントを抱えて帰る人
サンタクロースをワクワクしながら待つ子供達

その一方で暗闇の中
ご飯も食べられず
寒さに震えてる
子供達

クリスマスと言う日が
ただロマンチックだからとかそういう理由だけで
好きになるのではなく、
幸せの裏側で、そういう子供達が泣いていると
言う事も忘れないでほしい

そんな想いが情熱となり

一人の青年がクリスマス界初となる巨大工事を
成し遂げ、

子供達に笑顔をプレゼントをした

この事はクリスマスセンターでも
大事業となり、

ノリオはサンタクロース最高の賞である

ゴールドサンタクロース賞を受賞する事になった

「2007年ゴールドサンタクロース賞は

与えられた任務以上の

想いと情熱で

センターを動かし、

人を動かし、

クリスマス界の常識を覆す事で、膨大な子供達の
命を救い、未来の道を作り、国まで変えてしまう
道のりを作りあげた

ミタノリオ君に捧げるものとする」

長老が読み上げる

と同時に拍手がおこった

表彰式はノリオの希望で

南のスリフォレのオルバの城で行われた。

同時にまた、オルバも

それを推奨し、最大限の力を貸したと言う理由で

クリスマス賞を受賞した。

長老「ノリオ、本当によくやった。まさか君がここまでやるとは思わなかったよ
君は最年少でゴールドを取った初めての人間だ。

任務は4年だが、

君にはいずれセンター長になってもらい、

これからもサンタクロースとして任務を全うしてほしいと思っている」

長老は笑顔でノリオと握手した

ノリオ「ありがとうございます！自分も今まで生きてきた中で1番嬉しいです！
まだまだやりたい事がたくさんあるので
少しずつやっていきたいと思ってます
そこで相談なのですが」

長老「なんじゃね？」

ノリオ「クリスマス終わると家に帰らなきゃいけないのですが、
来年のクリスマスまでにはもっとやりたい事あるので、いつでもセンターに来て
勉強したり調べたりしていいですか？」

長老は笑顔でこたえた

「大歓迎じゃよ」

ノリオ「ありがとうございます！！」

その時

「ノリオおめでとう！！」って声と同時に
また拍手が起きた

民衆の中に際立った集団 から聞こえた声の主は
ババエロだった
ミカエル、ヨーフ長、ファシユラ、ダンジュラス、隣にはオルバ
みんなノリオに会いに来た

「ありがとうございます！！」

ノリオは力いっぱい手を振った。

第22章 ノリオお家に帰る(1/4)

ぱっと目が覚めたら部屋にいた

ノリオははっとして

すぐに部屋のポスターをめくった

そこには何も無い

でも夢ではない

確実に身体が覚えてる

いつもの小さい部屋に

ノリオは一気に現実に戻された気分だった

でもいいんだ！

任務は4年だから

もう今日からは来年の

クリスマスに向けて色々考えなくちゃ

でも本当に夢じゃなかったのかなあ・・・

ノリオは気分転換に外に出る事にした

部屋のドアに手をかざす時にノリオはそっと閉じたドアの向こうに歩く

そぶりを見せた

そしたらすっと通り抜ける事が出来た

「やっぱ夢じゃなかったんだ！！」

俺はまだサンタなんだ！！」

嬉しくなって外に出た。

すると頭に包帯を巻いたおじいさんがノリオをずっと見てる

そして声かけてきた

老人「ミタノリオ君かね？」

ノリオ「はい、そうですがどちらさまですか？」

老人「山路只之介じゃ。君をサンタに推薦したものだ。

今回は本当にありがとう よくやってくれたね

わしの元にもクリスマスセンターから御礼が来たよ」

ノリオ「ああ！ヤマジさん！知ってます

聞きました

この度は僕を推薦してくれてありがとうございます

おかげさまで最高にやり甲斐のある仕事をさせてもらいました」

老人「君を選んだのは大正解だったが、わしもまさか君がここまでするとは思わなかったよ」

ノリオ「それは光栄です。一つ質問していいですか？」

老人「ええよ」

ノリオ「それは光栄です。一つ質問していいですか？」

老人「ええよ」

ノリオ「どうして僕を選んで下さったのですか？」

老人は動きが止まった

老人「わしはサンタに決まって今年もやる予定だったのだが、クリスマスのカ月前に

突っ込んできた車に引かれてしまったのだよ

それも君の家の前で。

その時に病院に運ばれて

入院する事になったのだが

その時に事故で飛ばされた時に見た表札を

思い出したのがきっかけで君を推薦したのじゃよ」

ノリオ「表札？なんですか」

老人「帰って表札を見てみなさい。怒るなよ？

ふおっふおっふお」

老人は笑ってそのまま帰ってしまった

ノリオは訳がわからなかった。

後ろ見て自分のアパートの表札を見た

いつものように

自分の名前が書いてあった

「三田」

「.....」

「まさか・・・」

「え?」

「本当に?」

「それだけ？」

そう

気付いてしまった

わたくし三田憲男の
苗字を音読みすると
サンタになる

「えーーーーー!!!」

あんなに壮大な出来事の
きっかけは

これなの!!!？

悪い訳ではないが
ひじょーに微妙な気持ちになった

でもきっかけなんて
どうでもいい

今この瞬間に、あの子供達が笑顔でいてくれる
事が最高の幸せなのだ

一人一人の子供達の顔を
浮かべながら

「来年までにはもっと世界情勢を勉強して
今度は他の国の今度達に
プレゼントしにいくぞ！」

ってそう決めて家に走って帰った

今日はシャンパン買って一人で家でクリスマス打ち上げだ！

メリークリスマス!!!

世界に平和が訪れ
世界中の子供達が
手を取り合い
幸せになりますように

ミタノリオ